

令和4年度 立正大学文学部文学科
日本語日本文学専攻コース
卒業論文発表会資料（白岩広行ゼミ）

国語科教育と英語科教育の連携

金魚のことわざ・慣用句からみるジェンダー—江戸時代の女性たち—

現代日本語における美化語の使われ方—接頭辞「お」のつく語を中心に—

「バイト敬語」から見つめる敬語の将来

和菓子の命名法

埼玉県の方言—埼玉北部方言・埼玉特殊アクセントについて—

近代文学作品におけるオノマトペ—宮沢賢治を中心に—

気象現象を用いた感情のメタファー表現の考察—「雷」を用いた表現を中心に—

翻訳作品と役割語—漫画『NARUTO—ナルト—』を中心に—

方言話者の印象形成における方言が与える影響

関係性の持続によるポライトネスの変遷について

熟語の類義語比較—信を構成要素にもつ熟語について—

同意要求表現「クナイ」の使用実態について

日本の罵倒表現—婉曲的な意味を持つアホ・バカ方言—

※ 目次、主要参考文献の体裁について、白岩の判断で若干の変更を加えた箇所があります

国語科教育と英語科教育の連携

【論文の目次】

- 第1章 序論—本研究について— 1.1 はじめに 1.2 意義
- 第2章 国語科教育と英語科教育の現状
 - 2.1 求められる英語力 2.2 英語科教育における英文法教育の目標と評価
 - 2.3 国語科教育における学校文法教育の目標と評価
- 第3章 言語習得事項について
 - 3.1 小学校国語科で習得する学校文法 3.2 中学生国語科で習得する学校文法
 - 3.3 中学生英語科で習得する英文法 3.4 国語科、英語科の文法習得における差異
- 第4章 国語科教育における英語科教育との連携
 - 4.1 序文 4.2 メタ言語能力 4.3 メタ言語能力という点から見た英語科と国語科
 - 4.4 実践可能レベル

第5章 結論

【概要】

本論文では、国語科教育、英語科教育それぞれで取り扱う文法事項について整理し、その内容から、双方の連携について考察する。百留（2011）、松崎（2003）が述べるように、学校文法学習は、暗記中心の学習でつまらないイメージを持たれている。双方の連携を実践することで、今まで児童生徒にとって意味を見いださ辛かった文法学習を有意義な学習内容にすることが可能になると述べたい。

整理した文法事項を基に、それぞれの学習時期や違いを踏まえ、メタ言語能力を活性化することによって、学校文法の学習を英文法の知識と結び付け、有意義な学習とすることを目指す。

メタ言語能力の活性化による国語科と英語科の相乗的学習を行った菅井ら（2016）と同じ定義で論を進めていく。菅井らは、メタ言語能力を「言語を自覚的に運用する力」と定義している。国語科の授業内では、英文法を補助的に用いることで、国語科と英語科の連携は実践可能であると考ええる。本論文では、以下の二点に焦点を絞った。

①語順の違いについて ②「品詞」の違いについて（定義や品詞の区別、使い方の観点）
中心の活動として、日英文の比較を扱う。この連携から、日頃使用する日本語に対して、着目する視点を養い、文法学習の定着度を高められるということが筆者の見解だ。定着度を高めることで、自身で文の正当性の判断が可能になる。

【主要参考文献】

- 菅井三実・太田八千代・大河内奈津子（2016）「メタ言語能力の活性化による国語科と英語科の相乗的学習プログラム」兵庫教育大学
- 百留康晴（2011）「国語の授業と日本語文法」『島根大学教育学部紀要』44、島根大学教育学部
- 松崎史周（2003）「中学校国語科における「活用」の扱い—学校文法の問題点の緩和を目指して—」『大会研究発表要旨集』105、全国大学国語教育学会

金魚のことわざ・慣用句からみるジェンダー
—江戸時代の女性たち—

【論文の目次】

第1章 はじめに

第2章 先行研究

2.1 魚と日本人の関係：日本の食文化とその変遷 2.2 江戸時代以前の漁業

2.3 江戸時代の魚と魚食文化 2.4 食文化以外の日本文化における魚

2.5 金魚と日本人の関係 2.6 ことわざ・慣用句の定義

第3章 金魚のことわざ・慣用句

第4章 江戸時代の日本文化：文学・衣服・化粧など

4.1 女性と文学作品 4.2 江戸時代の衣服 4.3 江戸時代の化粧 4.4 花鳥風月の中の金魚

4.5 江戸時代の男性と女性の関係

第5章 おわりに

【概要】

本稿は、女性を侮辱する内容が多くみられる金魚のことわざ・慣用句について調べた。筆者は、今日まで主に観賞用とされてきた金魚の華やかさは女性の華やかな姿と重なり、金魚のことわざ・慣用句に出てくる女性たちについて考察した。

第2章では、江戸時代の日本人と魚の関係について食文化を中心に、その他祭儀や風習などの食文化以外での日本人と魚の関係についてまとめた。そうすることで、魚が日本人の生活に深く浸透していたことを示した。第3章では、金魚のことわざ・慣用句を「食料として用いられている金魚のことわざ・慣用句」と「食料以外として用いられている金魚のことわざ・慣用句」に分類した。第4章では、当時の文学作品の傾向、女性の衣服・化粧が男性からの影響を受けていたことや、鈴木(2019)をもとに日本人の自然観についてまとめた。鈴木(2019)は、「花鳥風月」は日本人にとっていいように改変された自然であることを述べ、「金魚」は「花鳥風月」の一部であり、「花鳥風月」は「手の中の自然」であるとも述べている。筆者も同様に考え、日本人に改変された「花鳥風月」を人間によって改良された「金魚」に見立て、さらに「手の中の自然」を「手の中の美しいもの」に置き換えて考えた。

このように考えると、「手の中の美しいもの＝花鳥風月＝金魚＝女性」となり、女性は男性の手の中の存在であったといえる。金魚のことわざ・慣用句、特に金魚が食料として用いられていることわざ・慣用句には、男性に翻弄されながら生きた当時の女性たちの姿が表されていると考察した。

【主要参考文献】

上野輝彌・坂本一男(2004)『日本の魚』中央公論新社

鈴木克己(2019)『金魚と日本人』講談社

現代日本語における美化語の使われ方
ー接頭辞「お」のつく語を中心にー

【論文の目次】

第1章 はじめに

第2章 先行研究

2.1 文化審議会答申「敬語の指針」より 2.2 菊地（1997）より 2.3 北原保雄（1978）より 2.4 外山映次（1977）より 2.5 井上（2010）より 2.6 三喜田（2003）より 2.7 村田（2009）より 2.8 鈴木（2003）より 2.9 村田（2016）より 2.10 本研究の目的

第3章 研究方法

第4章 調査結果と新聞と雑誌の比較

4.1 新聞における接頭辞「お」の付く語の特徴 4.2 雑誌における接頭辞「お」の付く語の特徴 4.3 新聞と雑誌における接頭辞「お」の付く語の特徴 4.4 新聞と雑誌における接頭辞「お」の付く語の差異

第5章 終わりに

【概要】

新聞と雑誌における接頭辞「お」の付く語の特徴について、新聞と雑誌でそれぞれの最多は「食」についての語であるが、共通の語は「人」に関係する語であるという結果となった。理由としては食についての語に接頭辞「お」が付いた名前はかなり多いため、一定の食品に偏らずそれぞれの食品に接頭辞「お」が付くこととなってしまうためと考えられる。おそらく収集する語を増やすと食に関する語が共通して最も多くなると予測する。

新聞と雑誌の分類を比較すると以下のような差異があることがわかった。「間違えるの」や「やめる」「店」「お終い」の言葉など、ネガティブな意味の言葉が多いことである。また、「決める」や「お国」などの語もこれらの語が雑誌には見つからず、新聞にあるというのは政治関係の記事が多いことからくる差異なのではないだろうかと考える。

次に新聞になくて雑誌にある語の差異は「挨拶」や「歩く」「聞く」「動作」「寒い」「心」「悩み」などの「感情」に関わる語が多いことである。鈴木（2003）で「女性の日常生活であまり使われない言葉には付きにくい」と言っている。よって雑誌も新聞よりは読者に女性層が多いことに影響を受けて「動作」や「感情」に接頭辞「お」が付きやすくなっているのだと考える。

【主要参考文献】

鈴木智映子（2003）「現代における接頭辞「お」「ご」の変遷」『学習院大学人文科学論集』

12、学習院大学大学院人文科学研究科

村田志保（2009）「日本語教育での接頭辞「お」のつく語三種の分類提唱についてー「おかばん」類、「お菓子」類、「おやつ」類」『人間文化研究』12、名古屋市立大学大学院人間文化研究科

坂本達・西方草志（2009）『敬語のお辞典』三省堂

「バイト敬語」から見つめる敬語の将来

【論文の目次】

第1章 はじめに

第2章 先行研究

2-1 敬語に関する先行研究 2-1-1 伝統的で美しい日本語としての敬語 2-1-2 新しい時代にふさわしい、分かりやすいものとしての敬語

2-2 バイト敬語に関する先行研究 2-2-1 お飲み物のほうはいかがですか 2-2-2 ご注文は以上でよろしかったでしょうか 2-2-3 こちらコーヒーになります 2-2-4 1000 円からお預かりします

第3章 先行研究の整理、問題提起

第4章 アンケート調査

4-1 調査概要 4-2 調査結果 4-2-1 アンケートⅠの結果 4-2-2 アンケートⅡの結果

第5章 アンケート調査の考察

5-1 アンケートⅠの考察 5-2 アンケートⅡの考察

第6章 検討

6-1 問題に対する検討 6-2 反論に対する検討

第7章 総括

【概要】

敬語の使用経験が浅く、使い方が不安定であると予想される10～20代を対象に、敬語に関する調査を行った。誤った敬語とされるバイト敬語に対する認識、使用実態を調査することで、敬語は今後伝統的な形を大切にしていくなすべきか、それとも新しい時代にふさわしい形で使用されていくなべきかを考察する、というのが本論文の趣旨である。

若者がバイト敬語を誤りと認識していながら使用していること、バイト敬語の使用や相手に与える印象にポジティブなイメージを持っていることなどを根拠として、バイト敬語は特定の相手を想定した主体的な言語表現のひとつであると結論づけるに至った。敬語が相互を尊重するための自己表現であるという伝統的な属性は今後も変わることはない。日々複雑化する人間関係において、その自己表現を達成させるためにこそ、敬語の形は柔軟に変化していくと予想される。

【主要参考文献】

辻村敏樹(1967)『現代の敬語』共文社

文化庁(2013,2015)「国語に関する世論調査」

https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/index.html

洞澤伸・岡江里子(2006)「「バイト敬語」を使う若者たち」『岐阜大学地域科学部研究報告』

和菓子の命名法

【論文の目次】

第1章 はじめに

第2章 先行研究

2.1 和菓子について

2.2 「菓銘」の定義

2.3 命名について 2.3.1 命名法の分類 2.3.2 命名の機能 2.3.3 命名の文法

第3章 調査方法

第4章 調査結果と考察

4.1 生菓子・半生菓子の分析 4.1.1 意味 4.1.2 季節 4.1.3 音 4.1.4 語種 4.1.5 生菓子・半生菓子についてのまとめ

4.2 干菓子の分析 4.2.1 意味 4.2.2 季節 4.2.3 音 4.2.4 語種

4.3 生菓子・半生菓子と干菓子の比較

第5章 普通名詞を含む和菓子の命名

第6章 その他の和菓子の命名

第7章 おわりに

【概要】

本論文では、和菓子に固有に付けられた名前、すなわち「菓銘」に着目し、その命名傾向を調査した。調査方法は、大きく生菓子・半生菓子と干菓子に分けて両者を比較し、『分類語彙表（増補改訂版）』を主に使用して分析した。また、先行研究を参考に命名法を「意味」「季節」「音」「語種」の4つのカテゴリーに分類し、それぞれの視点から和菓子の命名傾向を考察した。命名において、意味の面では、植物を始めとする自然物の語を多く使用し、命名者が美しいと感じたものを菓銘に反映させていることが分かった。季節の面では、春夏秋冬に合わせたモチーフを採用しており、各季節に対する日本人の感性が読み取れた。音の面では、例外はあるものの、音が与える印象を重視している菓銘は少ないと結論づけた。語種の面では、和語が圧倒的に多く使用されていることから、和菓子はやはり日本らしい菓銘が好まれているのだと考察した。生菓子・半生菓子と干菓子には共通する部分が多いが、相違点もある。例えば、干菓子の方が菓子そのものの名称を後続させやすいという点や、個別ではなく詰め合わせの全体を捉えた命名がなされやすいという点などである。また、干菓子は生菓子・半生菓子よりも6モーラ以上の菓銘が多いという傾向も見られた。

和菓子は命名にこだわることで、菓子ということよりも、季節感や製作者が込めた思いを表現しようとしている。味や意匠は当然のこと、菓銘も和菓子の魅力を引き立てる要素の一つであると確信できた。

【主要参考文献】

大月実（2007）「命名と名前—命名論の新たな地平」『認知の語学論考』8号 ひつじ書房
中山圭子（2006）『事典 和菓子の世界』岩波書店

埼玉県の方言
ー埼玉北部方言・埼玉特殊アクセントについてー

【論文の目次】

第1章 はじめに

第2章 先行研究の整理

2-1 埼玉県方言の分類 2-2 埼玉県北部方言

2-3 埼玉県方言における文末表現「べー」「ダンべー」 2-4 「べー」の用法

2-5 群馬県、栃木県、茨城県における「べー表現」

2-6 熊谷市における「べー表現」の意識調査 2-7 方言・共通語意識調査

2-8 埼玉特殊アクセントとあいまいアクセント 2-9 埼玉特殊アクセント 久喜市

2-10 東京東北部アクセント

第3章 調査概要

第4章 調査結果

4-1 ベー表現の使用の調査結果 4-2 ベー表現の意識調査

4-3 方言・共通語の意識調査 4-4 ベー表現・各意識調査の分析と考察

第5章 おわりに

【概要】

本論では、本庄市におけるベー表現の使用の調査と、意識調査をアンケート形式で行った。
また、埼玉特殊アクセントについての概要をまとめた。

ベー表現の使用の調査結果からは、若年層において少しの使用と、中年層、高年層における多くの使用、ベー表現の機能性の高さが確認できた。

ベー表現の意識調査については、使用する人物の条件は、概ね古瀬(2008)の記述通りとなったが、他者の使用に肯定的な点、消滅を望まない点に差異が確認できた。

方言・共通語の意識調査については、田中ゆかり・林直樹・前田忠彦・相澤正夫(2016)では、方言よりも共通語を好み、方言と共通語の使い分け意識は薄く、どのような相手でも方言をよく使うことはないと思っている、という特徴が見られたが、本調査では確認できなかった。

【主要参考文献】

古瀬順一(2008)「埼玉県方言における文末表現「べー」「ダンべー」について」『人文学部研究論集』19、中部大学人文学部

佐藤高司(2014)「北関東3県における若・中年層のベイ表現に関する調査報告(速報)」『共愛学園前橋国際大学論集』14

田中ゆかり・林直樹・前田忠彦・相澤正夫(2016)「1万人調査からみた最新の方言・共通語意識：「2015年全国方言意識Web調査」の報告」『国立国語研究所論集』11、人間文化研究機構国立国語研究所

近代文学作品におけるオノマトペ
～宮沢賢治を中心に～

【論文の目次】

1. はじめに
2. 暮らしの中の「オノマトペ」
 - 2-1.「オノマトペ」とは 2-2.オノマトペのある暮らし 2-3.方言のオノマトペ
- 3.「賢治オノマトペ」とは
- 4.『やまなし』における賢治オノマトペ
 - 4-1.「かぶかぶ（わらった）」の意味と用法
 - 4-1-1.先行研究を含めた検討 4-1-2.「笑う」と「かぶかぶ」
 - 4-2.「つぶつぶ（流れる）」の意味と用法 4-3.「つう」の意味と用法 4-4.「トブン」の意味と用法 4-5.「ぼかぼか（流れる）」の意味と用法 4-6.「もかもか（集まる）」の意味と用法
- おわりに

【概要】

今回、宮沢賢治の童話作品の一つである『やまなし』に出てきた、宮沢賢治独自とされるオノマトペについて調べた。調べ方としては、音象徴的観点からオノマトペの印象を捉えたり、宮沢賢治が用いた独自のオノマトペは、田守育啓によれば既存のオノマトペの派生と思われるものも多々あるため、辞書で似た音を持つオノマトペを取り上げ、『やまなし』本文に即した意味を当てはめたりすることで、意味の分析を試みた。また少数であるが、意味を考察した先行研究も参考にし、研究を行った。

目次 4 に記しているが、今回調べたオノマトペは、「かぶかぶ（わらった）」、「つぶつぶ（流れる）」、「つう」、「トブン」、「ぼかぼか（流れる）」、「もかもか（集まる）」の計 6 語である。これらの語を分析した結果、各々のオノマトペの意味は以下のように考えられる。

- ・「かぶかぶ（わらう）」は、「寂しさ」や「しづけさ」を醸しながら、自分の口から空気、つまり笑うことで放出された泡が水中に浮かんでいる様。
- ・「つぶつぶ（流れる）」は、「ぶつぶつ」の派生で、暗い泡や場面に合った泡の流れていく様。
- ・「つう」は、物体が滞りなく移動する様。
- ・「トブン」は、水面にある物体が落ち、それによって水面に波紋が生まれる様。
- ・「ぼかぼか（流れる）」は、水の流れて揺れながら弾み、鈍い水音を立てながら流れる様。
- ・「もかもか（集まる）」は、水面を通して写されている物体が、形を整えていく様。

【主要参考文献】

- 荻原桂子（2013）「文学教材の研究―宮沢賢治「やまなし」（小学校六年）の言語表現―」『九州女子大学紀要』49-2、九州女子大学
- 尚学図書（1991）『擬音語・擬態語の読本』小学館
- 田中育啓（2010）『賢治オノマトペの謎を解く』大修館書店

気象現象を用いた感情のメタファー表現の考察 —「雷」を用いた表現を中心に—

【論文の目次】

- 1 はじめに
- 2 先行研究
 - 2.1 直喩と隠喩 2.2 メタファー表現とその実現 2.3 気象現象と感情の結び付き
 - 2.4 気象現象による感情のメタファー 2.5 「光」に関するメタファー
- 3 「雷」についての記述と考察
 - 3.1 「雷」に関する記述 3.2 「雷」の記述からの考察
- 4 用例を用いた考察
 - 4.1 「雷が落ちる」「雷を落とす」 4.2 「雷に打(撃)たれる」 4.3 「青天の霹靂」
 - 4.4 「雷が落ちる」と「雷に打(撃)たれる」の違い
- 5 「雷」と「感情」の結び付きに関する考察
- 6 まとめ
 - 6.1 本稿のまとめ 6.2 今後の課題 6.3 今回の研究から興味を持ったこと

【概要】

本稿は気象現象「雷」がどのような概念メタファーを形成しているのかを示し、そこからこれまで述べられてきた気象現象による感情のメタファー表現に関する記述を検討していくことで、気象現象と感情の概念メタファーについて新たに言及していくことを目的とした論文である。

雷に関する先行研究の記述とコーパスの用例をそれぞれ基にして考察を行った結果「雷」では以下のような概念メタファーの実現が行われていることが分かった。

《「雷」の「音」「未知であることの畏怖の念」の性質が結び付いて「怒り」を表す。》

《「雷」の発生の「突然さ」「物理的衝撃」の性質が結び付いて物事の「唐突さ」「驚き」「動揺」を表す。》

また、その実現には特徴があった。起点領域について、先行研究では起点領域は身体的経験豊かな具体的なものとされていたが、「雷」のように身体的経験が少ない現象においては想像、見聞きした情報などといった抽象的なものや間接的経験が起点領域となっている。「光」を基盤としたメタファー的意味の実現について、先行研究では光が持続的であることが必要とされていたが、雷のような瞬間的な光でもメタファー的意味の実現が行われている。また、「雷」を用いた表現の「雷が落ちる」「雷に打(撃)たれる」では結び付いている雷の性質が異なりその性質によって表現される意味が変わっており、先行研究ではそのような例はみられなかった。以上より「雷」は気象現象を用いた感情のメタファー表現においては他の気象現象とは違った側面を持つものであることが分かった。

【主要参考文献】

- 松浦光 (2013) 「気象現象とメタファーの一考察 —精神における「晴れる」を中心に—」『言葉と文化』14、名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻
- 榎山洋介 (2006) 『日本語は人間をどう見ているのか』研究社

翻訳作品と役割語
—漫画『NARUTOーナルトー』を中心に—

【論文の目次】

- 第 1 章 はじめに
- 第 2 章 先行研究
 - 2.1 金水敏 (2003)
 - 2.2 山口治彦 (2007)
 - 2.3 金水敏 (2007)
 - 2.4 吉村和真 (2007)
 - 2.5 金水敏 (2014)
- 第 3 章 研究の方法
- 第 4 章 漫画『NARUTOーナルトー』から見る役割語
 - 4.1 『NARUTOーナルトー』日本語版の役割語
 - 4.2 『NARUTOーナルトー』英語版の役割語
- 第 5 章 木ノ葉丸の役割語「コレ」について
 - 5.1 木ノ葉丸の文末表現
 - 5.2 「これ」の意味
 - 5.3 「RIGHT」の意味
 - 5.4 「THIS」の意味
 - 5.5 表現の分析と考察
- 第 6 章 おわりに

【概要】

漫画やアニメ、映画など日本では当たり前のようにキャラクターを特徴づけるような「役割語」が使われている。しかし日本語の豊富な「役割語」を英語にした時にどう表現されているのか。本稿では漫画『NARUTOーナルトー』を用いて日本語と英語の「役割語」について考察していく。以下、第 2 章では先行研究について、第 3 章では研究方法について概説する。第 4 章では漫画『NARUTOーナルトー』で使用されている役割語を日本語版と英語版の両方を整理し英語の役割語がどう使われているか調査する。第 5 章では実際に英語に見られた役割語について考察していく。

【主要参考文献】

- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 金水敏 (2007) 『役割語研究の地平』くろしお出版
- 金水敏 (2014) 『〈役割語〉小辞典』研究社

方言話者の印象形成における方言が与える影響

【論文の目次】

序章	はじめに	1.1 研究背景	1.2 研究目的	1.3 方言とは
		1.4 広島方言とは	1.5 本論文の構成	
第1章	先行研究の整理と考察	1.1 「方言の持つステレオタイプ的なイメージに関しての先行研究とそれに関する考察」	1.2 「方言のパラ言語的特徴に関しての先行研究とそれに関する考察」	
第2章	調査概要	2.1 広島方言に対するイメージ調査	2.2 広島方言の会話音声を用いての調査	
第3章	調査結果			
終章	4.1 考察	4.2 今後の展望	4.3 今研究における反省点と限界	4.4 謝辞

【概要】

方言は、その方言が持つ抑揚、リズムといった言語的な特徴から連想されるイメージ。そして、その方言が用いられる地域や文化に依拠し、世間一般に広く流布したステレオタイプなイメージが存在する。これらの特徴が、方言話者の印象形成において、どちらが優先的に影響を与えるかを広島方言を対象に調査することを目的として、検証を行った。

パラ言語的な特徴から連想される人物像は、内田(2006)における抑揚、音の高さと話者の印象の関係から想起される人物像と、性格心理学におけるビッグファイブモデルを、参考に「外向性が高く、陽気で親しみやすい人物像」を設定した。ステレオタイプ的なイメージから想起される人物像は、事前のアンケート調査で得られたら広島に対するイメージを参考に「荒っぽい、怖い」といった人物像を設定した。

調査の結果、聞き手が話者に抱く印象に優位性を占めていたのはパラ言語的な特徴に基づくイメージであった。

両者の優位性を明らかにすることが出来たと、同時に先行研究に対して必ずしも方言=陽気で社交的な印象だけを付与するものではないといった可能性を提唱することが出来た。

【主要参考文献】

- 内田照久(2006)「未知のイントネーションから想起される話者の性格印象と方言地域の特徴」『音声研究』10(3)
- 川原繁人・桃生朋子(2017)「音象徴の言語学教育での有効利用に向けて-ウルトラマンの怪獣名と音象徴」『音声研究』21(2)
- 田中ゆかり(2011)『「方言コスプレ」の時代-ニセ関西弁から竜馬語まで-』岩波書店

関係性の持続によるポライトネスの変遷について

【論文の目次】

1 章 研究背景と目的

1.1. 研究背景 1.2. 研究目的

2 章 先行研究のまとめ

2.1. 友人同士におけるポジティブ・ポライトネスについて

2.2. 恋人同士における「ほめ」表現のポライトネス

2.3. ポライトネス・ストラテジーの謝罪表現について

3 章 研究方法

3.1 RP 談話について

3.2.1 RP 談話 1：初対面同士の会話における仮説

3.2.2 RP 談話 2：会ってから 1 年ぐらいの友達同士の会話における仮説

3.2.3 RP 談話 3：小さい頃からの親友同士の会話における仮説

3.3 RP 談話 1～3 全てを通した仮説

4 章 研究結果

4.1.1 初対面同士の会話分析 4.1.2 会ってから一年ぐらいの友人同士の会話分析

4.1.3 小さい頃からの親友（幼馴染）同士の会話分析

4.2 RP 談話：ケースごとの比較分析

5 章 総括

5.1 結論 5.2 今後の展望

【概要】

本研究では、関係性の違いによって会話に変化が見られるのかポライトネスを用いて実験をした。

結果としては、親密度の変化によって会話に含まれるポライトネスの比率が変わってることが分かった。初対面同士の場合はネガティブ・ポライトネスが多く見られ、親友同士の場合には、ポジティブ・ポライトネスが多く見られた。

今後の展望として、友人同士以外の関係性についても見ることができると考えられる。

【主要参考文献】

大津友美 (2004)「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス：「遊び」としての対立行動に注目して」『社会言語科学—』6 (2)、44-53、社会言語科学会

大塚生子 (2014)「恋人たちのポライトネス：ほめ意図の推論とイン/ポライトネスの評価」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要.外国語編—』、5 (1)、97-117

熟語の類義語比較
—信を構成要素にもつ熟語について—

【論文の目次】

- 第1章 はじめに
- 第2章 先行研究
- 第3章 意味分析
- 第4章 比較分析
- 第5章 まとめ

【概要】

この卒業論文では、「信用」・「信頼」・「信任」・「信念」この4つの語について詳しく研究している。

まず初めに「信」や「信じる」などの「信」に関係のある論文を見つけ、先行研究をまとめていく。

その後は、それぞれの言葉の意味を辞書を用いて調べていき、辞書の記述をまとめた。それらをもとに、4つの言葉の全て組み合わせ(5パターン)の共通点や相違点を洗い出していく。

さらに次の章では、簡単な表を用いて、信じる対象と目的や目標の有無はどちらであるのかを明らかにしていく。辞書の意味分析や表を用いた分析を行ったか後は、コーパスを用いて、例文を数多く上げていく。また、コーパスのみで例文を上げるのではなく、不特定多数の人が使用する Twitter の検索機能を使用し、「信用」・「信頼」と「信任」・「信念」このペアの検索を行なっていく。

最後に今回の研究で明らかにできたこと、明らかにできなかったことやこれからの課題を第5章のまとめでは記述していく。

【主要参考文献】

- 阿久津洋巳・立花琴子(2018)「調和性が高い人の信頼と疑い」『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』17
- 菊地雅子・渡邊席子・山岸俊男(1997)「他者の信頼性判断の正確さと一般的信頼—実験研究」『実験社会心理学研究』37(1)
- 近藤良樹(2001)「「信」にひそむ「疑」-乳幼児に「信頼感」は存在するか-」『HABITUS』9、西日本応用倫理学会
- 田中牧郎(2018)「近代日本語における「信ずる」を中心とする語彙体系の変化」『明治大学国際日本学研究』11(1)
- 水野将樹(2003)「心理学研究における「信頼」概念についての展望」『東京大学大学院教育学研究科紀要』43

同意要求表現「クナイ」の使用実態について

【論文の目次】

第1章 はじめに

第2章 先行研究の調査

2.1 「同意要求表現」とは 2.2 「クナイ」の意味的特徴 2.3 「クナイ」の形態的特徴

2.4 「クナイ」の共起関係

2.4.1 動詞が接続するとき 2.4.2 形容詞・形容動詞が接続するとき 2.4.3 名詞が接続するとき

2.5 「クナイ」の発生・変化の過程 2.6 「クナイ」に対する方言意識

第3章 Twitterでの調査

3.1 調査方法 3.2 調査結果と考察

3.2.1 クナイとジャナイの比較 3.2.2 動詞+クナイ 3.2.3 形容詞・形容動詞+クナイ

3.2.4 名詞+クナイ 3.2.5 クナイの形態

第4章 まとめ

【概要】

主に若者同士の砕けた場面で使われる同意要求表現で、「楽しくない？」のような形容詞を用いた表現から活用語尾のクと否定辞のナイが取り出され、「あるくない？」のように動詞肯定形にも接続する表現形式として「クナイ」が使用されるようになっている。2009年頃から調査の対象として様々な視点から「クナイ」は論じられてきたが、若年層のみならず広い世代で使用されている Twitter で調査し、「クナイ」の使用に関わる実態を考察した。

調査の結果、2009年の先行研究では動詞と「クナイ」が共起するとき、同じ動詞でも基本形より可能形の方が使われやすいとされていたが、現在は基本形の方が用例が多かった。形容詞の活用語尾が出自である「クナイ」が、(形容詞的な)状態を表す動詞の可能形から動作を表す基本形に浸透し、共起の幅を広げた成果であると考えた。

形容詞基本形と「クナイ」の共起において、「そんなに体は大きいくない」のような、同意要求ではなく否定の意味で使われていると思われるツイートが多く見られ、特に「眠いくない」という形は否定の意味で多く使われているようだった。

以上のことから、先行研究で「同意要求に特化した表現形式」と考えられていた「クナイ」は、「固定化された新たな文末詞」に変化している途中であると考えた。

【主要参考文献】

高木千恵 (2009) 「関西若年層の用いる同意要求の文末形式クナイについて」『日本語の研究』5 (4)、日本語学会

平塚雄亮 (2009) 「動詞肯定形に接続する同意要求表現クナイ (カ)」『日本語文法』9 (1)、日本語文法学会

日本の罵倒表現
—婉曲的な意味を持つアホ・バカ方言—

【論文の目次】

- 1 はじめに
- 2 先行研究のまとめ
 - 2.1 罵倒表現の種類
 - 2.2 方言の分布
 - 2.3 各都道府県のアホ・バカ方言について
- 3 調査・結果
 - 3.1 「クソ」
 - 3.2 「マヌケ」
 - 3.3 「トンマ」
 - 3.4 「フヌケ」
 - 3.5 「ボンクラ」
 - 3.6 「ノータリン」
- 4 全国での実際の使用状況
- 5 まとめ

【概要】

松本（1996）で作成された「アホ・バカ分布図」は、そのほとんどが「痴」や「愚」、「無知」などをストレートに表す言葉ではなく、もっと遠回しに、表現のユニークさや絶妙さが含まれた言葉であることが確認された。罵倒表現とは、ただ相手を傷つけるためのものではなく、コミュニケーションを取るためのもの、もっと面白おかしく人の失敗や愚かしさをけなして笑うために用いられていたものでもあるのだ。

そこで本稿では、「全国アホ・バカ分布図」に載せられなかった表現も同様に婉曲的な意味を持っていることを確認しようと、「クソ」「マヌケ」「トンマ」「フヌケ」「ボンクラ」「ノータリン」の6語を調査した。結果、文字通り間の抜けた「マヌケ（間抜）」、気持ちの抜けた「フヌケ（腑抜）」、ぼんやりして見通しがきかない「ボンクラ（盆暗）」、脳味噌が不足している「ノータリン」など、少しひねりのなさが気になるものの、どれもが直接的に「愚か者」を表す表現ではなかった。ただし、「クソ」だけは例外のように考えられた。「役に立たない、価値のないもの」という意味では慣用句でいくつか見られたが、単体では『県別罵詈雑言辞典』からも一例しか見られず、ほとんどが接頭（尾）辞で強調表現として用いられていた。そうすると、「クソ」は排泄物の意味を持つものを除いて、強調表現として流行したと考えた方が妥当だろう。

こうして、本稿でも、松本（1996）と同様、6語中5語が婉曲的に「愚か者」を意味している表現であることが確認できた。

【主要参考文献】

- 松本修（1996）『全国アホ・バカ分布考—はるかなる言葉の旅路—』新潮文庫
真田信治・友定賢治（2011）『県別罵詈雑言辞典』東京堂